

# 阪神 孤独死向き合おう

誰にもみとられず、息を引き取る「孤独死」。17年前の阪神大震災の被災者が住む兵庫県内の災害復興公営住宅では、昨年までに700人を超えた。そうした人たちが残した遺品の整理を担う人たちがいる。

## 復興住宅 700人超す

復興住宅の孤独死は、仮設住宅が解消した2000年以降、毎年40〜70人台。昨年は36人が亡くなった。12年間で717人になる。

神戸市中央区では昨年11月、死後4カ月余りの女性(74)の遺体が見つかった。知人の女性(74)は「同じ仮設住宅から移った人がいないと話していた。寂しかったのでしよう」。

神戸市兵庫区では昨年2月、死後数日の男性(71)の遺体が見つかった。老人会会長の牧野守雄さん(74)は月2回、集会所でコーヒーを飲みながら雑談する「ふれあい喫茶」を続けてき

た。「話す場があれば安否確認にもなる」。毎回50人ほどが顔を出す。男性もその中の1人だった。

と、高齢者を優先入居させたため、復興住宅の独居高齢世帯の割合は44%。一般の県営住宅の22%の2倍になる。(篠健一郎、小川崇)

## 遺品整理 被災者が汗



兵庫県西宮市の廃棄物収集会社「大栄」は、孤独死をした人が住まいに残した遺品を整理し、不要な物を処分する仕事も請け負う。屋宜明彦さん(32)は、担当になって3年になる。

昨年、会社が請け負った遺品整理の現場に向かう屋宜明彦さん(右) 11月15日、兵庫県西宮市西宮浜4丁目

遺品整理は300件近く。このうち約30件が孤独死だ

った。復興住宅での整理もこれまでに3件あった。屋宜さんも約40件の孤独死を扱った。昨年10月に神戸市東灘区のワンルームマンションで亡くなった高齢男性は死後2週間。カーテンを閉じた薄暗い部屋に洗濯物や食器が残っていた。

依頼してきた30代の息子は、電話口で怒っていた。「死んだときだけ連絡が来ても困るんや」。仏壇もあったが、「何もいらんねん」と言われた。僧侶を呼んで社員だけで供養した。

男性は十数年前まで神戸の西の方で息子と一緒に暮

らしていたという。震災で独り暮らしになった被災者かもしれないと思った。

屋宜さんは中学3年のとき、兵庫県宝塚市で阪神大震災に遭った。自宅の壁が崩れ、家族4人で公民館に避難。しばらくして近所の家に移った。身よりの

ないお年寄りの家の片付けを近所の人と手伝ったこともあった。

いま、誰にも面倒を見てもらえずに亡くなった人への思いを寄せる。「震災後、地元に戻れず、孤立化してしまっただけではないか」

(宮野拓也)